2024年度 第1号（Vol.59）

SHIRANE

発行/社会福祉法人白根学園　発行責任者／三木　健太
住所/横浜市旭区白根7-10-6　TEL.045-951-2669　FAX.045-951-7773

Homepage

目次

・ごあいさつ ……②
・行事 ……③
・事業所紹介 ……④
・研修報告 ……⑤
・街角紹介 ……⑥
・職員エッセイ／
　お知らせコーナー ……⑦
・まちがい探し／編集後記 ……⑧

私たちは変わらないために変わります

2024年5月
理事長 ： 三木 健太

桜が咲く爽やかな春の日に、新入職員8名を迎え、令和6年度がスタートしました。新しく白根学園に入職した皆さん、改めておめでとうございます。そして、これからよろしくお願いいたします。

64年前の1960年、三木信之と芳夫婦が「障害のある子供たちに教育の場を」という思いから、小さな施設に5人の子供たちを迎え、白根学園が始まりました。その後、多くの皆様のご支援を受け、児童寮（現在のぶどうの実）が完成し、3年後には社会福祉法人として認可され、成人寮（現在の光の丘）を開所し、現在の基盤となる学園の形が整いました。

さらに、皆様のご尽力のおかげで、歴史ある福祉法人として発展してまいりました。「知識より、信仰より、愛をもって第一となす」とは初代理事長が唱えた私たちの基本理念です。これは学園が始まって以来、変わらずに大切にしてきた基本方針です。職員行動指針の中には、「利用者一人ひとりの個性や障害特性、適性、可能性、生育の歴史や生活背景等を十分に把握し、それを踏まえて計画を立てて支援します。」とあります。新入職員の皆さんはこの基本理念・行動指針のもと、ぜひ、一人ひとりの物語に寄り添って行動してください。

冒頭の言葉は企業や団体が存続し発展するためによく使われる表現です。これを私たちにあてはめて考えれば、「変わらない」という部分は上述の白根学園の理念になります。では理念のために「変わる」とは何でしょうか。

生物学者のダーウィンは22歳のとき、世界周航航海に出て南半球を訪れ、多くの生物を観察し、帰国後、50歳のときに『種の起源』を執筆しました。165年前の話です。その中で彼は現在の私たちの行動を洞察するような報告をしています。

“Natural selection acts solely by accumulating slight, successive favorable variations, it can produce no great or sudden modification; it can act only by very short steps.”

ここで彼は「自然の中で生き残るには多様性と適応性を持ち、環境変化に少しずつ適応できることが最も重要である。」と記しています。“変わらないために変わる”という言葉は、一見すると矛盾した表現のように感じられますが、一定の目標や価値観、ビジョンを持ち続けながらダイナミックに変化する現代社会に適応することは、組織の安定性や持続可能性を維持するために必要であることを示唆しています。

私たちは2023年春から、芹が谷やまゆり園を社会福祉法人同愛会と共同運営しています。これは新しい社会に対する私たちの適応です。私たちは変わらないために変わります。少しずつ。

●風の丘の白根だるま作り

風の丘 ： 大矢 光希

白根学園風の丘では、楓（旧紙工班）にてだるま作り・販売を行っています。「白根だるま」のファンは多く、とても人気が高くなっています。

白根学園のだるま作りは47年前、白根神社のだるま市がなくなったことを惜しむ地域の声に応え「地域に恩返しがしたい」という思いで始まっています。小さなだるまは、紙製卵パックを裁断、水を加え粘土状にし、型抜き、下塗り、上塗り、顔を描いて完成となります。大きなだるまは石膏の型に何枚もの紙を貼り付け乾燥後、裁断、貼り合わせて形を作ります。定型の1号から15号のほかに、干支だるまやおにぎりだるまなども作成しています。顔描きは専門職員が行っていますが、利用者の皆さんは紙の裁断や粘土作り、下貼り上貼りや下塗り上塗りを担当として取り組んでいます。

今年度も作成しただるまを「金刀比羅大鷲神社の酉の市」や「林光寺のだるま市」、「白根神社の初不動」などで販売をしました。酉の市では約500個のだるまを販売、朝から閉店までお客さんが絶えず来店され大賑わいでした。また地域交流事業として職員が白根小学校へ出向き、子供たちにだるま作りを体験して頂く活動も新たに行いました。その甲斐あり、1月の初不動では沢山の生徒さんたちが来店されました。学校で作成してくれただるまのポスターを持参してくれ、店頭で紹介させて頂きました。

風の丘に所属する利用者の皆さんは、世の中の流れ同様、高齢化傾向にあります。今までのような活動量を求められなくなっているのも事実ですが、それでも住職や神主、地域の皆様から求められているだるまを丹精込めて作成し、白根の伝統を守り続けていきたいと思っています。

●〈たんぽぽ会・さくらんぼ会主催〉就労しらね・就労のぞみ合同新年会

社会就労センターしらね ： 吉井 和真

1月26日に、就労センターでは「たんぽぽ会・さくらんぼ会主催 就労しらね・就労のぞみ合同新年会」を行いました。皆さん、事前にお渡ししたしおりを見ながら、当日を心待ちにされていました。

迎えた当日、それぞれが思い思いの素敵なスーツやドレスを身に着け、いつもとは違った姿で集まりました。今年の会場は、横浜にある「HOTEL THE KNOT YOKOHAMA」。約4年ぶりの開催ということもあり、期待が高まる中での新年会開始となりました。

食事は、西洋料理のコースだったのですが、鮮やかな盛り付けの料理に、皆さん興味を惹かれたようでした。普段とは異なる、特別感のある雰囲気で、会を楽しむ様子が、写真からも伝わってくるのではないでしょうか。

そして、新年会と同時に行ったのが「新成人を祝う会」です。今年は、就労しらねから1名、大人の仲間入りをしました。その方は、今回は不参加でしたが、しらねで働く仲間から、紹介を受けました。これからも一緒に、就労センターを盛り上げていくことができたらと思います。

また、今年度を振り返るスライドショーの鑑賞も行いました。色々な思い出について、和気あいあいと談笑しながら盛り上がりました。

就労センター、利用者自治会として数年ぶりに行われた新年会。ますます親交も深まり、久しぶりということもあって、皆さんの中でも印象に残る行事となったようです。自治会役員の皆さん、企画と当日の進行をしていただき、ありがとうございました。

ぶどうの実

「短期入所事業」「日中一時支援事業」の紹介

ぶどうの実 ： 筒井 波夏

ぶどうの実は、白根学園で初めの施設となっており、創設者のダウン症のご子息の教育の場として始まって以来、福祉型障害児入所施設を中心に、理由があって家庭で暮らす事の出来ない児童の生活の場として支援を行っています。また、入所支援機能の他、地域で暮らす在宅児童の援護機関として、通所支援事業及び、短期入所及び日中一時支援事業も行っています。

短期入所は宿泊を伴い、日中一時支援は宿泊を伴わず、在宅の障害のある児童を、理由は問わず一時的にお預かりします。

利用に際して問い合わせの多い事柄や特徴を紹介します。

①利用した時には、主に重度障害男子／ある程度自立している男子／小学生くらい迄の幼少男子／女子といった4つの入所ユニット内に各1床の計4床が設けられ、利用児童に見合ったユニットを利用し、入所児童と一緒に過ごします。

②親と離れて過ごす事の不安に対し、ぶどうの実の職員や環境に安心感を持ってもらうために、利用始めは日中一時支援を数回行い安心して宿泊利用出来るようステップを踏みます。

③利用年齢は概ね4歳程度から18歳迄となりますが、18歳以降、高校3年の卒業時（3月末）迄利用が出来ます。

④利用期間中の登校について、入所児童の送迎を行っているみどり支援学校在籍児童は学校の送迎をしますが、他学校への送迎は実施していないため、ぶどうの実で過ごす事が出来ます。また、ヘルパーを利用し在籍する学校へ登校する方もいます。

⑤利用日数は受給者証に記載された日数の範囲となりますが、2ヶ月前からの予約となり、特に休日は満床になる事も多いため、日数の調整をさせて頂きます。

⑥利用の予約期間について、2ヶ月前の1日～7日の間に予約を受け付け調整します。以降の利用希望については先着順となり、希望日に空きがあれば利用は可能となります。

以上簡単な説明となります。その他のご質問や、利用をご希望の際には、ぶどうの実迄お電話でお問い合わせください。見学やご利用の案内をさせて頂きます。

研修報告

第34回全国グループホーム等研修会　中国地区大会inひろしま

ホーム里：今井 賢次郎

[2023年10月3日～4日]

この研修会では、「これまでの地域支援　これからの地域支援」というテーマで、1日目は行政説明やシンポジウムの形で開催。二日目は、「重度化・高齢化に対応するGHのあり方」の分科会に参加しました。

事例報告は、GHで生活する方で強度行動障害の方でした。支援内容としては、医療連携、環境構築を全員で整え、生活の組み立てを行い、支援を統一する為、支援員が見て学べるように二人体制で勤務する等の工夫がありました。

チーム作りでは、コンサルタントが先頭に立ち、「職員の困り事」から「利用者の困り事」へシフト転換し、会議では賛同してくれるコアメンバーを連れて説明。コンサルタントとしては、「無理、できない事」というのは利用者さんが決める事で、支援員はあきらめない事が大事。ただ、職員の困り事も事実な為、それも一緒に解決する事が大事。

GHでは一人勤務体制や支援員の思いが異なる為、時にバラバラな支援になりうる事があります。ホーム里でも上記の支援やチーム作りはとても参考となり、実践していきたいと思いました。

全国知的障害者福祉関係職員研究大会　山梨大会

しらねの里：児玉 統麻

[2023年11月16日～17日]

今回の大会テーマは【つむぐ・つなぐ　～その先にあるもの～】です。

この研修では伴走型支援について学びました。社会的孤立に対応する為につながり続けることを目的とする支援となります。

つながりが無くなるという事は「言葉を失う」。「言葉を失う」という事は「その人の物語」が失われる。つながりが無くなってしまうと孤立してしまい、その人の物語が失われます。孤立から守る為に、私たちは利用者さんとつながり続ける必要があると感じました。

また、利用者さんたちと出会う前に御本人は家族や地域の方たちとつながって来たからこそ、今の利用者さんがあり、人それぞれの物語があると感じました。こうしてつないできた物語を今度は私たちもつないでいく事が大切だと感じた研修でした。このつながりを大事にして、支援していきたいと思います。

支援力向上基礎研修について

光の丘：森脇 壮太

今回の支援力向上基礎研修では、区分認定の区分毎のおおよその発達年齢や、構造化の支援方法等、改めて支援の基礎を学ぶことができました。

その中でも、利用者さんの理解についてより考えさせられました。

文字の読み書きができるから、言葉でのコミュニケーションが取れるから理解できているであろうという事ではなく、視覚情報なども交えながら、個々の利用者さんの発達状況などを踏まえたうえで、伝え方などを工夫する必要性を強く感じました。

支援の根拠を知り、利用者さんの特性に合わせて考え、チームで深め、個々の利用者さんの支援にあたれるよう、今回の研修で学んだことを活かしていきたいと思います。

新生活を始めたAさんの支援について

希望相談室：井上 理沙

2023年度の拠点内研修にて、2023年4月にホーム希望を退去され、パートナーとの新生活を始めた女性利用者さんについての報告を行いました。

在宅時代の入院、希望への施設入所、そしてホームでの地域生活を経て30代後半からの新しいスタートです。今回、広報で紹介するにあたり、ご本人の許可を得ています。Aさんの今の生活について教えていただきました！

●引っ越ししてよかったことは？

なんでも自由！好きなものが食べられる。好きなひとと一緒にいられる。

●引っ越しして「初めて」のことは？

スマホ代を自分持ちにした。料理をはじめた。今は夕方に買い出しに行ってつくってる。彼や家族にも協力してもらって、銀行で新しい通帳をつくったり、役所での手続きをした。ホームのとき入ってた自転車保険の解約も電話でした。

●これからしたいこと

子供はもたずに2人でマメシバを飼いたい。そのためにもうちょっと広めでペット可のところへ引っ越したい。

彼と一緒にパスポートつくって、旅行に行きたい。海のきれいなところ。

もちろんお困りごとやちょっとしたケンカはありながらも、「やることはやる（やるべきことはやる）」、「感謝（おいしいものが食べられること、好きなひとと一緒にいられることはあたりまえじゃない）」をお2人の合言葉に、今の生活を楽しまれています。

今後もAさんのたくさんの「初めて」に寄り添い、共有しながら、Aさんの望む暮らしの実現へ向けサポートしていきたいと思います。

街角紹介

現在、センター和では18箇所のグループホームの管轄拠点として日々、職員、世話人100名を超える体制で利用者さんの生活のサポートをしています。利用者さんは、一般企業や福祉施設等に通い仕事をして、休日は個々過ごされ、外出される方やホームでのんびり過ごされる方等様々です。
今回は、休日・余暇に利用する、お気に入りスポットを紹介します。

横浜動物の森公園　里山ガーデン

住所：神奈川県横浜市旭区上白根町1425-4（よこはま動物園ズーラシア隣接）

紹介者：山﨑 亜美

横浜動物の森公園里山ガーデンは、よこはま動物園ズーラシア北門に隣接しています。そこでは、季節によって様々なイベントが行なわれています。春と秋に行われている『里山ガーデンフェスタ』では、季節の綺麗な花が沢山咲き誇り、出店等もあって散歩にとてもピッタリです。
利用者さんの外出先の定番スポットで、よく利用させて頂いております。イベントが行われていない期間でも、自然豊かな公園なので、気持ちよく散歩をする事が出来ます。里山ガーデンフェスタが実施される時期を楽しみにされている利用者さんも多く、多種多様で色とりどりの花々を眺め季節を感じながら散歩をしたり、公園内の出店で買い物をする事で、ちょっとしたお祭りに来た様な気分を味わっておられます。

横浜ラーメン弐七家　白根本店

住所：神奈川県横浜市旭区白根7丁目20-3

紹介者：遠藤 七勢

事業所から徒歩1分以内にある『横浜ラーメン弐七家 白根本店』。日曜日の昼食の一番人気で利用します。トッピングも豊富で色々プラスしてしまいたくなるラインナップ。無料のトッピングも生姜、唐辛子、にんにく、と豊富にあり値段も1000円でお釣りが返ってきます！利用者さんの一番人気は「弐油（ニーブラ）＋追い飯つき！（900円）」まぜそばのタレの香りが食欲をそそります。ボリューム満点で皆さん大満足です！
美味しいアレンジ方法は食卓に表示されていますので是非ご堪能下さい！

ながさき洋品店

住所：神奈川県横浜市旭区白根7丁目18-13

紹介者：有馬 功弥

50年近くにわたり白根学園がお世話になっている洋品店です！
多くの利用者さんが利用して、名前を伝えるだけで取り寄せサイズなど把握してくださっており、あっという間に取り寄せて頂けています。
プレゼント用のラッピングも色々とご提案して頂けて利用者さんも終始笑顔！
皆様、白根学園にお出での際に、是非お立ち寄りください。

職員エッセイ

ホーム里：根岸 真里奈

大学卒業後、白根学園に入ってから早いもので4年の月日が経った。入社5年目を迎えた私のこれまでの仕事を振り返る。

入社1年目。学生の頃と環境が変わり、めまぐるしい毎日。右も左もわからず、業務に励んではミスも多いし、周りに迷惑をかけてばかり。学生時代にやっていた飲食店のアルバイトより責任も多く、1つミスしたら周りの人に迷惑がかかる。思うように自分の能力が発揮できないそんな自分が嫌になり、時には泣いてしまう事もあった。自分の能力の低さを目の当たりにして、自信を無くしていた時期だった。

入社2年目。少しずつ業務にも慣れてきて、利用者支援も楽しんでいたが、相変わらず、ミスも多く、落ち込む毎日。そんな自分に自信を中々持てず、好きなバンドの曲を聴いて元気を貰いながら日々仕事に励んだ。

入社3年目で、部署異動。新たに環境が変わり、不安な毎日だったが、この異動は、自分が変われたきっかけとなった。どうしてそう思えたのかというと、ある先輩職員に“自分を認めてあげてみな”と言われた事がきっかけだった。この言葉を聞いた時はどうすればいいのか少し悩んだが、まずは、些細な事から自分を認めてあげようと試みた。少しずつ自分を認めてあげる事で、以前に比べたら自分に自信を持てるようになり、毎日が楽しい。今までの自分を変えて下さった先輩職員には感謝しているし、私の憧れだ。

現在は、自分で自分を認める事を大切にしながら日々業務に励んでいる。

お知らせコーナー

正規職員・嘱託職員募集中！

白根学園では、利用者さんの生活に関わるお仕事をしていただける方を募集しています。
スキル・知識・資格の有無は問いません。少しでも関心をお持ちでしたら、是非ご応募ください。

正規職員 ▶ 入所施設・生活介護事業所・グループホームの利用者の生活に関わる全般業務

嘱託職員 ▶ 入所施設・生活介護事業所・グループホームの生活サポート・送迎・給食・世話人など（曜日・時間帯は応相談）

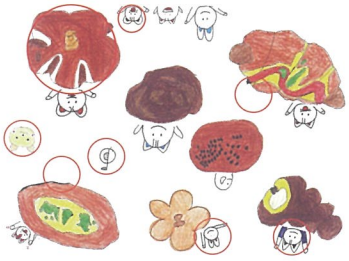
［お問合せ先］
社会福祉法人白根学園 法人本部採用担当
Tel：045-951-2669

ホームページのお問合せからもご応募いただけます。
www.shirane.or.jp

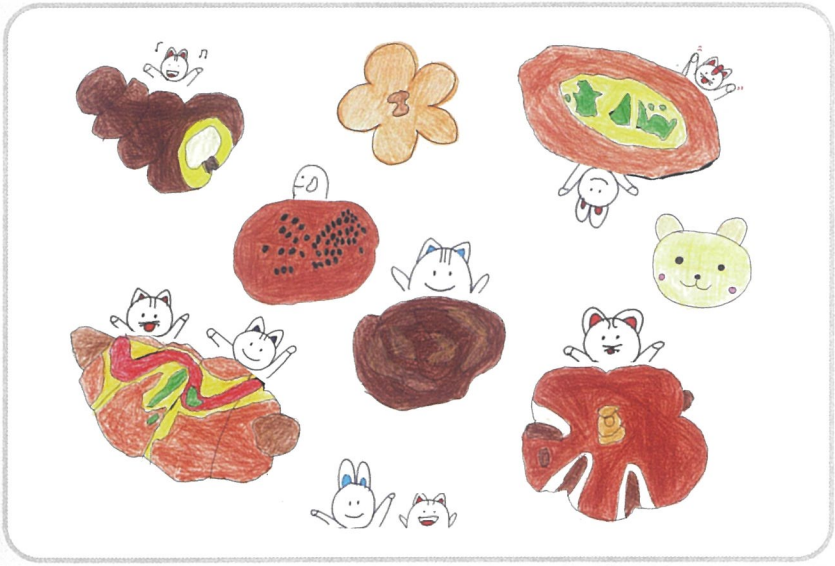
8P

まちがい探しの答え

※逆さになっています。



まちがい探し



この上下の絵の違いが
分かるかな？
白根学園の利用者さんが
作った間違い探しです。
8つ間違いがあるよ。
よーく見ないとわからないから
頑張って見つけてみよう。
答えは7ページにあるよ。

作：麦の丘
原田 智広さん
佐藤 あかねさん
佐藤 由香さん
3名の合作です。

編集後記

麦の丘：広橋 梓

2023年度は、長かったコロナ禍のトンネルの出口がようやく見えてきたように感じる1年でした。白根学園でも様々な行事が戻り、生活の中に変化が生まれ、日常が動き出したことを肌で感じる日々です。

広報しらねの作成にあたり、今回も各事業所から利用者の皆さんの写真が集まりました。イベントでの一幕、生活の中の一場面、どの写真も弾ける笑顔であふれており、心待ちにしていた楽しみが再開していくことへの喜び、また、当たり前の日常を送れることのありがたみを改めて感じました。

さて、今年度は広報しらねにとっても大きな変化の年となりました。白根学園の魅力をめいっぱい発信すべく、広報委員で記事の内容についてテーマや企画、構成などアイデアを出し合い、話し合いながら作り上げました。その過程において、知らなかった白根学園の多くの側面を見ることができ、白根学園に様々なカラーがあることを感じました。

利用者の皆さんや職員がどのような思いを持ち、考え、何に心動かされる日々を送っているのか。これまで積み重ねられてきた歴史と、白根学園を作り上げられてきた方々の思い。支えてくださる地域の皆さんへのメッセージ等、白根学園の様々なカラーを、本誌を手に取る皆さんに感じていただけますと幸いです。

これからも法人の皆さんからご意見やアイデアをいただきながら、進化し続ける広報誌を作っていきたいと思います。